

豊島半七副理事長(一宮商工会議所会頭)に聞く

## 地場産業発展の核となる施設目指して

～10回、パリコレメゾン招聘～

インタビュー・FDC月刊情報誌「テキスタイル&ファッション」  
編集長 山下 征彦

### ■第一号のセンターは一宮に

——まず、設立前後の経緯からお聞かせ下さい。

豊島＝FDCの設立は昭和57年（1982年）、開館は59年ですが、その3年前の54年に第二次オイルショックがあり、林紡績（現サンファイン）の倒産や過剰設備の共同廃棄事業が行われるなど大変な時期でした。市況面でも56年には投機筋の介入で、不況にもかかわらず糸糸定期相場が暴騰し、産地は大混乱に陥りました。こんな時、地場産業振興のための核となるオペレーションセンターが欲しいという声が産地内外から上がり、55年に打ち出された国の地場産業総合振興対策に沿って、地場産業センターを設立しよう、ということになったのです。

——順調に推移したのですか。

豊島＝何事もそうですが、反対意見もあり、紆余曲折はありましたが、思った通りのテンポで進みましたね。まず地場産業振興センターの話が中小企業庁から打ち出された直後、当時の江崎通産大臣に「第1号は地元」と陳情しました。旧愛知3区（選挙区）の関連市町村や業界団体からも出捐（しゅつえん）して第三セクター方式でいくことになりました。その際、問題となったのが、名称でした。地場産業といっても、この地域にはテキスタイルもアパレルもインテリアもあります。異業種では七宝焼きなどもあり、繊維センターとはいかないのです。その時、大臣が「地場産業振興センターで



豊島 半七副理事長

は固い。ファッションデザインセンター（略称FDC）にしてはどうか」と提案され、この名称となったのです。

——県などの対応は。

豊島＝当時は仲谷知事でしたが、知事は「商売につながるか、どうか」を一番心配しておられました。これに対しては「FDCは地場産業の発展に貢献する。そしてビジネスにつながる」ということを理解していただきました。

——その後の経過は。

豊島＝森一宮市長（当時）とたびたび陳情に上京しましたが、雪で新幹線が刈谷付近で止まりイライラしたこともありました。55年12月27日、最終的に設置は決まりました。56年には地場産業振興センター制度で国の補助金2億円が決まりましたが、このときはさすがにホッとしましたよ。出捐（しゅつえん）団体となっていたいただいた愛知県、尾張西部24市町村、業界18団体の足並みも揃い、57年には建物の起工式を行い、58年12月に完成したのです。

## ■ファッションの五条件

——開館は翌年でしたね。

豊島=59年の開館です。開館記念式では森英恵さんに記念講演をお願いしたのですが、森さんの言われた5つを今でも覚えております。



森 英恵さん

——どういう話をされたのですか。

豊島=第一はファッションを育むには雰囲気というか、環境が大切である。街並みとか町そのものが持つ文化ですね。第二は関連しますが、美術館とか博物館などの設備の存在が不可欠であること、第三はビジネスホテルではなく都市型シティホテルがあること、第四は、少し驚きましたが、おいしい食べ物がその地にあること、そして第五は有名なデザイナーがいることでした。早速、「先生、一宮に拠点を置いて下さい」とお願いしたら、「東京にいないと仕事ができないの」とやんわり断られました。

——5つの条件を満たすのは大変ですね。

豊島=出来ることはしなくては…と考え、都市型ホテルに付きましては名鉄に話にいきました。また東海銀行（現UFJ）や名古屋商工会議所の三宅会頭（当時）にも誘致を相談しました。それぞれホテル経営のプロに話していただきましたが、すべて断られました。「一宮でシティホテルは採算が合わない」、「名古屋、岐阜、犬山まで簡単に行ける」という訳でね。

——他の条件はどうですか。

豊島=街並みなどは、当面、どうしても

ない問題です。その他の事項も大変なことで、頭を抱えました。

——さて、FDCがオープンしました。当初の主な事業は何でしたか。

豊島=その前に、神田一宮市長（現愛知県知事）から、「FDCはどういう性格のものか」と問われたことがあります。私は「テキスタイルとアパレルの融合の場と位置付けている」と答えました。従って事業内容もそれにそった内容です。具体的に主な事業はFDCテキスタイルコレクション、マーチャダイジングセミナー、インポートファブリック展、新商品開発事業、各種セミナー・講習会及び手描き染・手織教室の開催などです。これらの中には歴史的使命を終えて、平成15年度から中止したものもあります。企業でもそうですが、事業領域の見直しは必要です。

——織物競技大会もありましたね。

豊島=全国織物競技大会は、昭和26年から39回にわたって続けられ、平成3年の一宮市制70周年記念の「国際ファッション&テキスタイルウィーク」、いわゆるFATEX91で休止となり、その後ジャパン・テキスタイル・コンベンション（JTC）の中のコンテストとして引き継がれました。これは平成14年に名称をジャパン・テキスタイル・コンテスト（JTC）と改称、人材育成にも重点を置いたのです。



JTC2002

——テキスタイルコンテストについてもう少し詳しく説明を。

豊島=FDCでの開催になってからは、会社中心の出展から個人主体のイベントに置き換えました。人材育成の立場から個人名での応募にしたのです。これに反対がありましたね。「上位入賞者がスカウトされる恐れがある」とか「入賞者の給料があがる」とかね。結局は個人出展、個人表彰になりました。FDCでの開催の第一回目のグランプリは残念ながら、尾州産地からは出ませんでした。

### ■ショー、10回はやり抜こう

——パリコレクション参加者のショーもやられていましたね。

豊島=そう。国際的舞台上で活躍するメゾンのショーを尾州産地で、という思いが高まりました。平成3年のFATEX91から始めました。神田前市長や谷市長はじめ関係者は、「困難があっても10回はやろう」、という意気込みでした。名称はパリ・ファッション・ファンタジーで、森英恵さんとオリビエ・ラピドスさんがFATEX91で競演したのが第一回でした。世界のメゾンが見えるということで、大変な人気で、前売り券は早々に完売、当日は立錫の余地がないほどでした。

——10年間続きましたか。

豊島=森さんの2回を含めて2000年までに10回行いました。森さん以外の招聘メゾンはルコアネ・エマン、ピエール・バルマン、ニナリッチ、ギ・ラロッシュ、エマニュエル・ウンガロ、パコ・ラバンヌ、ジャン・ルイ・シェレル、ルイ・フェローです。

——どういう評価でしたか。

豊島=一宮市民を含めて尾張西部地域の

ファッション関係者、テキスタイル従事者にファッション文化とアパレルへの認識を高めました。日本の繊維・ファッション業界へのインパクトと言う点でも伊勢丹が毎回10名前後を来場させるなど、インパクトはあったと思います。

——失礼な質問かも知れませんが、パリのオートクチュールへのコネクションはあったのですか。

豊島=森英恵さんですよ。我々も怖いもの知らずで、「一流のデザイナーであること」、「必ず本人が来ること」と条件を付けたのです。森さんにオートクチュール協会の会長に話をつけていただき、実現しました。会長も一宮を訪れ、色々とお話しました。来なかったデザイナーが一人いましたが、これは心臓病で飛行機に乗れなかった方です。神田知事としては2005年の万博で世界一流のデザイナーのショーを、という思いがあったのではないのでしょうか。このイベントは神田さんの市長在任中8回、後任の谷市長になって2回やりましたが、知事の思いは強かったと思います。後に谷市長と長尾さん（尾西毛工理事長）、佐々木さん（一宮繊維卸センター理事長）と私でその可能性を探るため、パリのメゾンを回ったのですが、結果は膨大な費用がかかりましたし、難しい条件が多かったですね。

——10年間の継続はすごいことですね。

豊島=日本広し、といえども10年間も続けてこれだけのショーをやったのは一宮だけでしょう。本物のファッションとの出会いは画期的で一大エポックです。効果を数値で表すことはできませんが、わが国のファッション文化に大きく貢献したと思いますよ。

——メゾンの方の反応は。

豊島＝日本の片田舎の一宮によく来てくれました。例えば、前夜祭にワインで乾杯しようとした時、あるデザイナーは「ここは日本、日本酒で乾杯しよう」と日本を理解していたし、事前に挨拶に行こうとすると「ショーが終わってからにして。今は緊張しているから」と言うのです。プロ意識ですね。一宮であろうと、どこであろうとショーと自分のブランドを大切にするわけです。世界の一流は違う、と強く感じ入りました。

### ■皇太子殿下がFDCにご行啓

——この20年、FDCには多くの著名人が訪れましたね。

豊島＝開設直後から通産省（現経済産業省）のお方や全国のリソースセンターの方々が来ました。



皇太子殿下、妃殿下ご行啓のひとコマ

最も緊張したのは昭和61年11月8日の皇太子殿下、妃殿下（現天皇陛下、皇后陛下）のご行啓です。平成6年11月には常陸宮殿下ご夫妻もご来館頂きました。皇太子殿下のご行啓の際は、10月におこなった秋冬トレンド展を御覧いただきました。ご説明役として風合いの話になった時、私は「触ってお確かめ下さい」と言ったのですが、後から「お触れ下さいというべきだ」と言われました。常陸宮殿下とは宇宙飛行士の向井

さんの話題になり、メダカは宇宙酔いをするか、どうかの話となり、殿下が「宇宙でも水の中にいるのだから、宇宙酔はしません」と答えられたのを記憶しております。

——色々な思い出がありますね。さて、20周年を迎えたわけですが、今後の方向は。

豊島＝FDCは今年度から新機軸を打ち出し、国際化を踏まえて更にビジネスにつながるよう、事業内容を一新しました。具体的にはテキスタイルとアパレルの融合ですね。平成15年、JTC（ジャパン・テキスタイル・コンテスト）の入賞作をエキスポフィルに初出展しましたが、これなど今まで考えられない画期的なことです。また、昨年JTC準グランプリの素材は大手アパレルに大きく取り上げられました。

——FDCルネッサンスと言われておりますが。

豊島＝ルネッサンスのように前進しようと言うものです。ファッション事業に関してはプロダクト事業、パーソン事業、プロモーション事業に大別できます。プロダクト事業は売れる物作りの推進を内容としたもので、産地の匠を結集した「匠ネットワーク」、ネリーロディ社とのコラボレーションによる「ユーロ・テキスタイル・プロジェクトチーム」、FDC独自のオリジナル素材開発、テキスタイルプランナー協議会による開発、次世代繊維開発など行っています。このうち、「匠」と「ユーロ」は平成15年12月のJC（ジャパン・クリエーション）に出展し、合わせて1,096点ものリクエストがありました。「プランナー協議会」では話題のトウモロコシ繊維や風合いを損なわない水洗い可能なウール100%のスーツ素材を開発しております。もちろん関係機関のご協力もいただいております。

——ネリーロディ社との提携はメリットが大きいですね。

豊島＝世界的に有名なファッション情報企業であり、特にアパレル業界ではそのトレンド情報は定評があります。産地よりアパレルの方がよく知っています。それとFDCが提携しているわけで、ご指摘の通り大きなメリットとなっています。JCで、ネリーロディの指導を受け製作をした「匠」や「ユーロ」の作品が大好評だったことを見ても提携は成功でした。



匠ネットワークの記者会見

——パーソン事業は。

豊島＝「売る人」の養成です。尾州は物作りに関しては得意ですが、売るのは問屋まかせの部分が多かったのです。(財)ファッション産業人材育成機構と提携して「創造的マーケター養成講座」を開設したほか、各種の技術セミナーを行っています。マーケター養成講座は次世代の経営者、幹部を対象にしていますが、開催日が土曜日にもかかわらず、ほとんど欠席がありません。

——発信にも積極的です。

豊島＝良い物を作っても提案、発信をしなければ認められません。JCなど東京での展示会への参加、尾州でのテキスタイル・エキシビション開催、FDC情報誌「テキスタイル&ファッション」などで、産地発、

FDC発を訴求しています。露出度を高めることで、尾州産地には「面白い素材がある」、「尾州の素材はすごい」というイメージを植え付けていきたいですね。



テキスタイル&ファッション

——地域おこしも行っていますが。

豊島＝地場産業発掘事業や手描き染教室、手織教室、おやこふれあい教室など尾張西部24市町村と一体となって展開しています。住民参加のFDC活動を強めていきます。

### ■出会いの場を創出

——最後に今後の抱負を。

豊島＝産地は今、大変厳しい状況にあります。設立当初の精神に立ち返り、ビジネスに役立つ業務を推進します。2月4日から6日までわが国で初めてのジャパン・ヤーン・フェアもFDCで開催します。最近開発された多くの差別化糸を産地の人に見てもらいます。新しい商品との出会い、国内・海外の人との出会いの場など、FDCは関係団体とも協力してビジネスチャンスの創出に研ぎをかけます。

——長時間ありがとうございました。